

もくじ

新常設展解説②富士講の纏…P1 はい 文化財係です48 伊興遺跡出土の木簡 下…P2  
厄除地藏尊設立百周年…P4



常設展示「人々のつながりと行事」  
で展示している富士講の用具



江戸消防記念会十一区による纏振り  
昭和46年(1971) 足立二丁目付近

# 足立史談

第689号

2025年7月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

## 新常設展紹介 ②

### 富士講の纏 千住丸藤元講

まとい せんじゅまるとうもところ

郷土博物館



丸藤講の講紋

富士講の纏は、富士山を信仰する仲間が使用したもので、千住にあった丸藤講(まるとうこう)のもので、丸藤の講紋(こうもん)に、富士山の形を加えた立体的な頭になっています。丸藤講とは、

馬簾(ばれん)とよばれる革製の細長い飾りが周りを取り巻くように下がっています。手に持って、振り上げたり回したりすると、馬簾が踊り、独特の動きをつくりまわす。

新常設展を紹介するシリーズ。今回は、二階ギャラリー、「人々のつながりと行事」のコーナーから、富士講の纏(まとい)を紹介します。■富士講の纏 纏とは、おもに江戸の火消組などが、自分たちの組の標識として使ったもので、上部はデザ

享保十八年(一七三三)に亡くなった富士信仰の行者(ぎょうじゃ)である食行身録(じきぎょうみろく)の弟子、高田藤四郎が広めた教えを伝える講派です。

この纏は、富士信仰に篤く、先達(せんだつ)をされていた柳川峰造氏にご寄贈いただいたものです。区内では、江戸時代の終わりごろから各地で富士講が盛んになり、富士山の御縁年である庚申の年、大正九年(一九二〇)から戦前にピークを迎えました。ただし、纏が遺されているのは、区内で一点だけで、講中を象徴するものとしては、珍しいものです。この纏の由来についてご紹介します。

■丸藤千住元講の系譜 千住三丁目二に住んでいた柳川重之助氏(しげのすけ・明治十一年生まれ)は、丸藤千住元講の先達として自宅に看板を掲げ、大きな祭壇を持つなどして活動していました。柳川重之助氏は、五反野で先達を務めていた柳川栄蔵氏(弘化三年生まれ)の次男で、その孫にあたる柳川峰造氏(大正九年生まれ)も先達を務めるなど、富士信仰に篤い家柄でした。

柳川重之助氏は、昭和二十四年(一九四九)に亡くなり、重之助氏の没後は、甥にあたる峰造氏と近所の講員によって日々の勤めがされていました。昭和四十四年に没後二

十年祭が営まれたことを節目に、昭和四十六年に家の処分をし、遺された祭具等は足立二丁目の柳川峰造氏宅に移されました。

写真は、祭具を千住の重之助氏宅から峰造氏宅に移す際に撮影されたもので、峰造氏寄贈のアルバムにありました。錦の布を掛けた祭具の筥（はこ）を峰造氏が掲げ持ち、重之助氏の肖像写真や重之助氏のものと思しい高下駄を講員の方たちが持っています。

千住の重之助氏宅の祭壇で、最後の拝みをしたのち出発し、西之宮稲荷神社へ参拝後、ここで、江戸消防記念会十一区の人々による纏振りが行われました。そして纏を先頭に、列を作って神社を出発し、所要所で纏振りをしながら峰造氏宅へ進みました。

荷神社に参拝し、ここで、江戸消防記念会十一区の人々による纏振りが行われました。そして纏を先頭に、列を作って神社を出発し、所要所で纏振りをしながら峰造氏宅へ進みました。

この纏は、重之助氏の自宅祭壇の側にあったためか、富士信仰で行う線香の護摩焚きの煙で燻され薄茶色に変色しています。

■「遠方の社参詣」 豊作や商売繁盛、日々の幸福を祈るため、足立の人々は地元の氏神のほか、遠方の社寺へも御利益を求めました。

### 西之宮稲荷神社へ参拝後の記念写真

なかでも、富士山への登拝は、一生のうちに何回もない特別なことで、富士登山を報告する絵馬が地元神社に多数遺されています。

出発の際は講員たちが大勢で列を作って見送り、また帰って来る出迎えも、お祭り騒ぎであったといえます。纏はそのようなときに、講の象徴として振られたものと思われ、纏を伝える講として、大きな活動をしていたことがうかがえます。展示された纏から、富士信仰に寄せる期待、幸せを祈る人々のつながりを想像してください。

(学芸員 萩原ちとせ)



\*足立史談687号に続き、伊興遺跡出土木簡四点のうち三点を紹介します。

・「騎馬像」木簡(一八・九×五・九×〇・八(cm)、ヒノキ材) (図3)

下端が欠損した状態でみつかりました。上下二体の騎馬像が描かれています。馬上の人物は幟頭(ぼくと)をかぶり、弓矢を携えています。幟頭は成人男子の髻(もとどり)を



(図3) 「騎馬像」木簡  
(左) 表面・(右) 裏面

覆い包む布帛製のもので、唐からもたらされ、官人を表す被り物になりました。

この騎馬像を見ると、馬の前脚が折れ曲がり、幟頭から後方にのびた、纓(えい)とよばれる紐がたなびくように見えます。これらの様子から、この騎馬像は疾走した様子を描いていると読み取れます。

古代日本で騎馬像に関する資料は、正倉院宝物に例を見ることができ、それらはササン朝ペルシアの影響を受けたものとされています。伊興遺跡の騎馬像とは被り物に類似性を見ることができそうです。

一方騎馬像全体の姿は、高句麗墳墓に描かれた壁画に類似しています。馬が疾走する様子や弓を持つ様子、矢を入れる胡録(やなぐい)を腰に携えている点、共通して挙げられます。

木簡は通常、記録や荷札用などに使用されたものが多く出土していますが、騎馬像木簡はほかの出土遺物との関係から、馬にまたがる官人を神格化し、災厄除けなどの「木札(もくさつ)」として、祭祀に用いられたのではないかと考

えられています。全国的に騎馬像木簡の出土例はなく、きわめて珍しいものといえます。

・「口（立）薦（たつこも）」木簡（二八・九×五・九×〇・八（cm）、ヒノキ材）（図四）

端部の切れ込みや、弧状の溝は二次的加工と考えられます。墨跡が失われているものの、その部分が盛り上がっていることから、わずかに読み取ることができ、「口（立）薦二巻」と書かれています。薦は蓆（むしろ）のことで、蓆をつなぎ合わせる屏風のように立てて風よけとして使用していたものを表します。

・文書木簡一五・四×三・四×〇・四（cm）、スギ材（図五）

側面と先端が刀刃のように若干加工され、3mm程度の穴が六つあけられています。これらの加工は二次的なものと考えられ、木簡の幅から短冊型をしていたと考えられます。墨跡がわずかに確認できることから、もとは文書木簡として使用されていたと推測されますが、解説には至っていません。

【B・d・8区東端部の様相】  
B・d・8区東端部は、伊興遺跡の中でも低地帯に位置しています。（図版・足立史談第687号参照）

このため出土した遺物は、当該地点の南側に位置する自然堤防（微高地）側から流れ込んだものと考えられます。この調査区からは、木簡以外にも斎串や木碗などの木製品が出土し、墨書土器や木簡とともに、祭祀に関連した遺物と考えられます。動物骨も三十点ほど見つかり、これらすべて奈良末〜平安時代初頭のものとして位置づけることができます。

前述の遺物以外にも、古墳時代終末期の遺物や、土師器、白玉などの古墳時代の遺物も多数確認され、これらの遺物も自然堤防から流れ込んだものと推測されます。B・d・8区東端部はこれらの出土遺物から、奈良末〜平安時代初期、自然堤防上になんらかの官衙施設（かんがしせ



（図4）「口（立）薦」木簡



（図5）文書木簡  
（左）表面、（右）裏面・保存処理済

つ・役所、官庁のこと）が存在したことが想定され、伊興遺跡の中でも重要な意味を持つ地点であることが明らかになりました。

#### 【木簡のその後】

出土した木製品の多くは、水分を含むことで形を保っています。乾燥によるひび割れや変形を防ぐため、取り上げた木製品は水につけて仮保管し、専用の防腐剤を溶かした水につけて冷暗所保管をしています。木簡のように特に重要視される木製品は、保存処理を行い、展示・保管を行っています。

伊興遺跡出土の木簡は、発掘調査後保存処理をおこない、赤外線写真撮影を行って墨跡を確認、『伊興遺跡Ⅱ（一九九九）』で成果を報告しています。その後平成十二年三月、伊興遺跡から出土したほかの木製品

とともに、平成十一年度東京都指定有形文化財（考古資料）として登録されました。現在は遺物保護のため現物展示はしておらず、伊興遺跡公園展示館階段壁面にパネルにてご紹介しております。この他にも展示館では、伊興遺跡で見つかった出土品等を展示しております。

（伊興遺跡発掘調査員）

\*第687号（令和七年五月）掲載の「伊興遺跡出土の木簡 上」にて、騎馬像木簡（図3）の写真が（図2）と同じものになっていました。今号の「伊興遺跡出土の木簡 下」では、再び「騎馬」像木簡の記述から始めました。

# 厄除地蔵尊設立百周年

伊藤早穂子

■地蔵講の大祭 五月二十四日、足立区立千寿双葉小学校(千住大川町一七一)の南東の一面にある千住厄除地蔵堂で、厄除地蔵尊の祭礼が行われました。

毎月二十四日は地蔵の縁日とされ、「正五九」(しょうごく)、すなわち一月・五月・九月の二十四日は、

とりわけ重要な日とされています。千住大川町の厄除地蔵堂でも、この日に合わせて大祭を行っています。

今年は、大正十四年に地蔵がこの地に鎮座して百周年という記念すべき年です。地蔵堂を訪れた子ども達には供物(お菓子)を、奉納金を納めた人には供物と講札を配るというのが例年の習わしですが、百周年記念であることから、これらに加えてお礼状や記念品(地蔵をかたどった根付、千住宿四百年記念のメモ帳など)を同封したほか、厄除地蔵講の

過去の活動についてA4用紙にまとめたものも参考資料として配布されました。

当日は、朝の八時半頃から準備に勤しむ地蔵の世話人たちの姿が見られました。九時頃に町内放送を行うと、近隣住民が徐々に訪れはじめます。大祭の日には必ずお参りをするというご年配の方もいれば、偶然地蔵堂の前を通りかかった親子連れもいます。中には、地蔵にお参りするために区外から訪ねてきた人もおり、足立区で生まれ育ち、現在は台東区にお住まいの女性は、百

周年記念の知らせを受けて、数十年ぶりに厄除地蔵堂を訪れたといいます。昼前には、同じ千住大川町の源信寺のご住職による法要が行われました。午後三時から大川町氷川神社社務所で催された「厄除地蔵尊鎮座百周年記念の会」では、源信寺のご住職や千住双葉小学校の先生といった来賓の方々と、世話人たちが宴席を共にし、地蔵についての講話や、三遊亭小とりさんによる奉納落語に耳を傾けました。

厄除地蔵は代々、講元を中心とする講員たちが管理を担い、大祭を執り行ってきました。講元は六代目まで引き継がれましたが、今日では、「講」という形態はとらず、大川町東町会の住民有志が「世話人」として地蔵のお世話を担っています。世話人の一人である岡野伸一郎さんは、小学校で地蔵の由来についての講演を行うなど、地蔵信仰を次世代に引き継ぐ取り組みに励んでいます。鎮座百年を迎えた地蔵が、これからも地域の人々に親しまれていくことでしょう。

なお、千住厄除地蔵の由来については『足立史談』第五二二号(二〇一一年八月)にも詳しいので、ご覧ください。

(郷土博物館専門員)



地蔵堂にお参りする親子



百周年記念に新調された幕